SCR Press
Student Counseling Room Press
Vol. 67 2025.12.1. 日本工業大学学生相談室

Vol.62 で対話においては好奇心を持って相手との違いを知ろうとすることが大切だと書きました。でも、対話の実際において、どのようにすればその好奇心を表現できるのでしょうか。ケース・バイ・ケースだと言えばそれまでですが、それでも起こりがちな場面について考えてみることは、何かしらヒントになるかもしれません。今月からは対話の実際について、いくつか取り上げてみましょう。

## こちらの事情を伝える

休みの連絡をしない学生がいたとします。そのまま許容するか、マナー違反だと注意するか、意見が分かれるかもしれませんが、これらはどちらも相手の事情を聞いていない点で、対話的ではありません。

しかし、その学生が対話の必要性を自覚していない場合には、なんらか教職員側からの投げかけが求められます。

許容でも注意でもなく、対話を持ちかける一つの方法は、こちらの事情を伝えることです。たとえば、「休みの連絡をもらえないと、～～（予定していたことができない or 他の人を大事にしていないように見える、など）ということになって、あなたと他の人との関係が悪くなってしまうと思うのだけど」などでしょうか。「だから社会でやっていけない」などの批評はしません。

## 相手の事情を聞く

こちらの事情を伝えて、対話が必要な事態が生じているとわかってもらえたら、今度は相手の事情を聞きます。この例では、「あなたはどういう事情で、休む時に連絡をしないのですか」ということです。責める感じにならないように気を付けましょう。伝えたいのは好奇心ですから。

好奇心が伝わると、相手は事情を話してくれるかもしれません。すると、休もうと思って休んだことはなく、予定を憶えていれば必ず出席しているということがわかるかもしれません。つまり、休む時は忘れているときなので、当然連絡することも思いつかないわけです。これがわかれば、連絡云々のことよりも、出席率を上げるにはどうしたらよいかという具体的な話し合いに入れます。ここまで対話が展開すれば、この例では学生のやる気や心構えを問題にしても的外れであることがよくわかりますね。